

# 家畜衛生だより 平成27年5月号

紀北家畜保健衛生所	電話	073-462-0500
紀南家畜保健衛生所	電話	0739-47-0974
紀南家畜保健衛生所 東牟婁支所	電話	0735-58-1481

## ◆◇ 衛生害虫について ◇◆

ようやく寒さが和らいできたと思ったら、日中は暑いと感じるような日が続くようになってきました。気温の上昇とともに畜舎内、周辺にハエや蚊、ダニなどの衛生害虫が増えてきていませんか？これらの衛生害虫は人間にとっても非常に不快なものです。家畜や家禽にとっても大きなストレスとなり、著しく生産性を低下させます。加えて、これら衛生害虫が病原体を運び、家畜や家禽に様々な伝染病を感染させます。衛生害虫対策を行っていない地域では爆発的な流行が起こり、甚大な被害が起こることがあります。

### 衛生害虫等が媒介する疾病

#### ○アカバネ・アイノ・チュウザン病（牛）

ヌカカにより感染し、感染した母牛自身に一般症状の異常は認められませんが、流死産、異常子牛を出産し、難産となることがあります。ヌカカの活動時期前にワクチン（牛異常産3種混合不活化ワクチン等）を接種することで予防が可能です。

#### ○イバラキ病（牛）

ヌカカにより感染し、発熱や泡沫性流涎、鼻汁などの症状を示し、重篤なときには咽喉頭、食道麻痺による嚥下障害を生じます。致死率は10%程度で流死産が起こることもあります。ワクチン接種による予防が可能です。

#### ○牛流行熱（牛）

ヌカカにより感染し、突発的な発熱、呼吸異常、流涙、流涎等の症状を示します。致死率は1%程度と低く、ワクチン接種による予防が可能です。

牛流行熱、イバラキ病、アカバネ・アイノ・チュウザン病に関しては、各地域での流行状況を予察するため、6月から11月までの間4回子牛の採血を実施しますので、対象となった農家ではご協力をお願いします。

#### ○牛白血病（牛）

近年、各地域で最も問題となっている疾病です。蚊やアブ、サシバエなどの吸血昆虫の他、注射針、直腸検査手袋の使い回しなどウイルスを保持している牛の血液を介して感染が広がります。体表リンパ節の腫大や骨盤腔腫瘍、眼球突出などを認め、一般症状が悪化し、食欲不振、起立不能となります。また症状を示していなくても、食肉処理時に発見されることが多くあり、食肉は全廃棄

となるため、経済的損失が大きくなります。ワクチン等による予防法はなく、感染しても発症する牛は約 10%程度のため見逃され、牛群全体に感染が広がることとなります。

#### ○日本脳炎（豚、馬）

豚ではコダカアカイエカにより感染し、異常産が発生します。生まれた子豚が神経症状を示し、すぐに死亡したり、白子、黒子、ミイラ等の死産胎子となることも多いです。種雄豚では、発熱、陰嚢腫大及び交尾欲減退を示し、繁殖成績の悪化につながります。ワクチン接種による予防が可能です。また、人の日本脳炎の流行とも関連しており、豚の体内で増えた日本脳炎ウイルスを蚊が吸血し、人が感染するので、豚がウイルスの増幅装置となります。馬では、アカイエカにより感染し、発熱や呼吸異常、沈うつ、狂騒などの神経症状を示します。ワクチン接種による予防が可能です。

#### ○ロイコチトゾーン病（鶏）

ニワトリヌカカにより感染します。貧血や緑色便を呈し、産卵率の低下、軟卵の増加を示します。重症例や幼雛では出血を伴い急死することもあります。ワクチン接種による予防や肉用鶏においては、低濃度のサルファ剤の間欠または連続投与による予防法があります。

#### ○ワクモ（鶏）

他の疾病を感染させるのではなく、ワクモによる吸血によって貧血や吸血ストレスによる飼料摂取量の減少と産卵率の低下（10%前後）、卵重の減少、重度寄生（数万～10万匹／羽）による死亡例もあります。気温の高くなる春から秋にかけて被害が多くなりますが、断熱性の高い鶏舎では冬場の被害もみられます。殺虫剤による駆除が有効ですが、長期間同じ薬剤を使うと抵抗性が出てくることもあるので、定期的な薬剤の交換が必要です。

ここに示した疾病は代表的なもので、他にも多くの疾病が衛生害虫により媒介されます。一部の疾病では、ワクチン等による防除が可能です。感染源となる衛生害虫の発生を防ぐことが重要です。衛生害虫を全く発生させないことはできませんが、その数を減らすことは可能です。畜舎内の糞尿の除去、適切な堆肥処理、畜舎周辺の水たまりなどをなくすことによって、衛生害虫の発生は大きく減少します。

また、生乳、卵、食肉出荷との兼ね合いはありますが、殺虫効果のある薬剤の使用やイヤータッグなど忌避剤の活用も効果が高いです。衛生害虫を減らし、人及び家畜・家禽にとってストレスのない畜産につなげ、疾病予防を行いましょう。

気になることや不明な点がありましたら、最寄りの家畜保健衛生所までご相談ください。